

水循環企業登録・認証制度のあり方検討会（第1回）
議事概要

日時：令和8年2月18日（水）13:00～15:00

方式：対面・オンライン併用

場所：中央合同庁舎3号館 2階会議室

【議事次第】

1. 開会

2. 内閣官房水循環政策本部事務局長 挨拶

3. 座長挨拶

4. 構成員挨拶

5. 議事

1) 水循環企業登録・認証制度のあり方検討会の運営について

2) 水循環企業登録・認証制度の方向性について

3) その他

6. 閉会

【内閣官房水循環政策本部事務局長挨拶】

(宮武事務局長)

- ・水循環企業登録・認証制度は、企業による社会貢献的な水循環に資する取組のさらなる促進を目的とし、令和6年7月に創設し、令和6年度が99社、令和7年度は148社の企業を登録・認証したところ。これは、事務局をはじめ関係者の皆様の本当に地道な努力により、多様な企業の皆様にこの制度を知ってもらい、賛同を得た、その成果だと考えている。
- ・水をめぐる課題の解決には、産学官民、多様な主体が連携して、それぞれの強みを生かして取り組んでいくことが不可欠だろうと思っている。特に、企業に関しては、官と民

をつなぐ重要な役割を持っている。その一方、産と官の関係につきましても、どうしても透明性・公平性を求められるというところも欠かせないところかと思う。それを制度として具現化したのが、この登録・認証制度であると私は理解をしている。

- ・この認証制度で認証されたいろんな企業があり、その中には既に豊富な実績を積み重ねて、効果的に流域に根差した活動を展開されている先進的な企業もある。こうした企業の活動というのは、ほかの企業の水循環の重要性に関心を持ってもらうチャンスにもなり、また、それが行動につながるきっかけとなるのではないかと考えている。
- ・さらに、我が国の健全な水循環の取組を国内・国外に発信するなど、まさに、水循環政策推進に主体的に我々と一緒に協働する、そういう存在になるのではないかと期待をしているところ。
- ・こういう思いを踏まえて、この制度の持続的また発展的なより高いステージへの進化をしたいということで、この検討会を設置したところ。今、認証の2回目が終わり、3回目も始まっていますから、4回目から進展した制度がスタートできるように、そういう目途でこの検討会の議論をいただけたらと思う。
- ・特に、委員の皆様には多様な立場の方々に参加いただいている。それぞれの立場から本制度の将来像を見据えた議論をいただければと考えている。

【座長挨拶】

(辻村座長)

- ・今回委員になっている先生方の中でも、この認証制度を検討するための有識者会議のときから、引き続き委員の方もいるかと思う。認証制度が実際に動き出して、昨年度は140を超える認証ができたということで、着実に伸びているということを知ることが非常にうれしく思い、それをさらに発展させるためのこの会議に呼ばれたことも、非常にうれしく思っている。
- ・先週、マレーシアで大学と企業と学生と一緒に教育するような事業を行っていた。最近そういった産学連携が推進される傾向ではあるが、企業が教育の場に直接入っていると、学生のモチベーションが違った方向で良くなるというところがある。もちろん、学術的な部分にも良い面もあるが、それが社会とどうつながっているのか直接学生たちが感じることができ、同じベースにあって多様な視点で教育をすることは非常に良いことだと感じたところ。
- ・先月の末には、水循環企業連携フェアがあった。指導している学生にも声をかけ参加させたが、水に関する企業でこんな多様な取組があるのだというのを学生たちが非常に感慨深く感想を言っており、むしろ、あの場は大学生にもっと宣伝をして大勢来てもらうと、企業のモチベーションも上がっていいのではないかと思ったところ

- ・こういった取組、認証制度は、いろいろな意味で多様なステークホルダーにとっても益のあるものになると思ひ、また、それが我が国における健全な水循環施策の推進に関する取組を海外に対して発信する契機にもなると感じているので、この制度をよりよいものにするために、委員の皆様様の積極的なあるいは多様な意見をぜひお願いしたいと思っている。

【意見交換の概要】

1) 水循環企業登録・認証制度のあり方検討会の運営について

(特に意見なし。)

2) 水循環企業登録・認証制度の方向性について

(辻村座長)

- ・資料3に沿って2つに分けて議論を行う。まず前半が、資料の17ページまでの登録・認証制度のこれまでの取組状況について、後半が18ページ以降の論点の整理についてご意見を頂戴したい。
- ・まずこれまでの取組状況について、ご意見を頂戴したい。名簿順に指名するので、これまでの取組の内容について、ご意見、コメントを頂戴したい。
- ・それでは、浅井委員からお願いしたい。

(浅井委員)

- ・二点ほど意見を述べたい。
- ・一点目が、認証の目的に関わる部分である。登録・認証が広がりを見せていることに、皆様様の努力に敬意を表したい。登録・認証の企業の内訳に関して、水に関わるステークホルダーの幅広さを鑑みれば、もっと多様な業種に広がっていきけることがよいのではないかと思う。登録・認証されている企業の規模に関しては、大企業が中心であるということを知っている。規模やインパクトという意味では大企業の取組は大変重要だと考えているが、その数や雇用人数という観点からは、中小企業も含めて広がっていくことが重要ではないかと考えている。この辺り、もし立ち上げのときの意図と齟齬があるのであれば、教えていただきたい。
- ・二点目は、ポータルサイトに関して、水循環の取組は本当に幅広い方との協働、コレクティブアクションであると思う。そうしたいろいろなつながり、お互いに足りないものを補完していくというところで、ほかの企業との連携、あるいは事例にもある研究者、NPO、地域団体への支援のようなことも含めて、ニーズとシーズのマッチングというか、その解決策をうまく補い合っていくような、そのようなプラットフォーム的な機能の強

化・取組も重要であると思う。対面のイベントも同様だが、ウェブ上などでもそうした機能が強化されていくとよいのではないか。

(辻村座長)

- ・いずれにしても、多様なステークホルダーの協働が重要だというご意見には、非常に賛同しているところである。そういったことも含めてこの後の議論でさらに深められればと思う。
- ・続いて、木場委員、お願いしたい。

(木場委員)

- ・5ページの、今までの参加企業の数多くで大変うれしく思ったが、昨年あたりはCHALLENGE企業が3社しかないというのは寂しいと思った。既にもうアクティブな方々は意識も高いし、かなり進んでいる企業だと思う。しかしながら、今後は大企業だけではなく、まだそういうところに動き出していない中小企業を含めてもっとチャレンジしてもらおうよう、こちらも間口を広げ、声をかけて、仕組みづくりを強化してほしいというのが印象。
- ・イベントに関しては、いろいろと修正しながらご要望に応じて満足度が上がっており、年々よくなっている感じがとてもいいと思った。
- ・認証制度のご報告を受け大切だと思ったことが、企業の企業価値向上において水への取組がどの程度各企業に重要なのかというところ。脱炭素関係は様々な場面でそこに対する数値の公表や、ある種、義務づけられた部分もあるため熱心だが、水に取り組むことがもっと評価されるような地ならしというか、空気づくりをしなければいけないと思う。
- ・これはもっと基盤の部分でいうと、企業というよりは一般の方が水は大切だということをしつかりと捉まえ、水に対してしっかりとした対応をしている企業を評価していくような流れをつくる必要がある。制度ができたのでどんどん申し込もうということだけではなく、もっとその価値について一般の方にも周知していく必要があるということが、ご説明を聞いての漠然とした感想である。

(辻村座長)

- ・確かに水はあるのが当たり前の状態になっていて、一方で当たり前ではなくなるというか、この冬も関東地方は渇水であり、一方で西側では雪が降り過ぎてといるところもある。そのような状況も含めて考えていくことが必要だのご意見を伺っていて思った。
- ・続いて、瀬田委員、お願いしたい。

(瀬田委員)

- ・まず、感じたことは、この2年間既に実施されている認証制度と附随しての企業連携フ

フェアが、非常に素晴らしい取組だと感じた。この中で、それぞれの企業の取組の内容も素晴らしく、取組そのものをなぜ実施しているのかということが恐らく課題ということになると思うが、流域ごとで課題が異なるため、そういった認識を広く共有できるというところで、非常に有用な場なのではないかということで拝聴した。

- ・ 6 ページから 9 ページまでのところに各企業の取組の事例が記載されている。この内容を拝見すると、それぞれの地域において認識されている課題等に対して、しっかりとインパクトの出るような内容をそれぞれの企業が工夫し、取り組んでいるのではないかと考えた。そういったところのつながりをもう少し可視化していくところが出てくると、より地域の方からの受け入れやすさや理解の深まりということで、社会全体へのメッセージの発信にもつながっていくのではないかと考える。

(辻村座長)

- ・ ご挨拶の中で中屋委員からも自治体などの地域のつながりの重要性についてご発言があった。そういうところにもつながっていくのかと思った。
- ・ 千葉委員、お願いしたい。

(千葉委員)

- ・ 瀬田委員もおっしゃったように、この認証制度そのものもさることながら、こういった企業連携フェアという形で参加した企業同士の交流が促進されたことが重要だったのではないと思う。水循環の保全や管理には、地域の固有性という話もあったが、これを行えば正解であるという、パッケージみたいなものがない。ベストプラクティスの共有、成功体験、失敗体験を含めて情報交換する場があったことが、この制度の目的である機運上昇という意味で、企業同士がつながって水循環というテーマの中でエコシステムをつくっていく観点で、非常に意味があったのではないと思う。
- ・ しかしながら、これから何をしていくというところで、制度に登録、企業連携フェアへの参加及びその場での情報交換、それに満足していくということではなくて、次のこのフェーズ2を踏まえてどのように設計していくのかがまた重要になってくると思う。

(辻村座長)

- ・ まさにこれからどうする、考えなくてはいけないところだと思う。
- ・ 続いて、中屋委員、お願いしたい。

(中屋委員)

- ・ これまでの2年間の認証・登録制度の取組、非常によかったと思っている。ウェビナーやフェアなどの取組を今後も続けていってもらいたい。
- ・ これらの取組だけでなく、例えば自治体が抱えている問題を具体的に肌で感じてもら

う見学会みたいなものも付け加えると、非常にありがたいと思う。自治体は、非常に様々なリスクなどを抱えており、自治体はリスクばかりを考えているようであるが、企業から見た水循環をよくすることによるメリット、そういう見方もあると思うので、そういう情報交換もできることから、自治体もいろいろやっていると思うので、見学会のようなものを積極的に企画していただきたいと思う。

(辻村座長)

- ・別の水循環に関わる有識者会議の中で安曇野市を見学したことがある。現場で会議をやるといういろいろなことが盛り上がり、課題も見つかる。課題解決の方策、または人とのコネクションができるなど非常に良いのではないかと思う。

(辻村座長)

- ・多様なご意見をいただいたと思う。大企業はもちろんウエルカムだが、中小規模の企業も登録・認証にどんどん参入するといったことでは、複数の団体・ステークホルダーが協働しているような取組に対しても認証・登録制度がどんどん広がっていくといいのではないかという所感も持ったところ。中屋委員からのご発言があったが、地域のつながりも含めて多様なステークホルダーが協働することをどうやって盛り上げていくかということが、フェーズ2に向けてどうするということにつながっていくのかと意見を伺っていたところ。

(辻村座長)

- ・それでは、後半部分の論点の整理について議論を進めたい。こちらから指名することなく、委員からのご発言で進めたい。事務局からのご説明の中で、論点が幾つか提示をされているところである。
- ・1つは、資料23ページの水循環において効果の高い取組を実施している水循環ACTIVE企業に求めるものが適切かという論点。それと、24ページ、水循環ACTIVE企業からさらに優秀な取組をしている企業を選出する枠組みが適切かということ、また、その選出の基準となる効果の高い取組とはどういうものかということが論点として挙げられている。
- ・加えて、現在の登録・認証制度はあくまでも取組をしているという取組自体が対象になっているが、そこから効果を定量的に評価するということが海外の認証等では行われている。何も全て海外との比較で話をする必要はないが、既に制度としてはある。企業の中ではそういったものを視野に準備を検討していることなどを全く関係なく進めていくというのもエフォートの観点からどうかという点もある。こういったことを念頭に置きつつ考えていくのかという感じはしているところ。

(浅井委員)

- ・ 1つ目は、前半のセッションで木場委員からあったとおり、周知については、非常に重要なところだと改めて思っている。健全な水循環に貢献することがどれほど重要なことかという認識・理解を広げていくことが大切だと思う。よって、周知に関しては、単に制度の周知というよりは、健全な水循環に関する啓発というところと併せて、一体的にぜひ強力に広報を推進していただければと思う。
- ・ それから、水循環企業に求められるものや方向性に関して、自社のみならず外部を牽引する力だとか、巻き込む力は評価すべきポイントであると思う。その意味で事務局案に賛成をしている。関連した取組の広がりや意識の向上という観点からも、いろいろな方たちの関心を高めていくとか、ほかの方の模範になるとか、ほかの何かを刺激していく力も重要なポイントかと思う。
- ・ 評価に関しては、取組の認知も重要かと思う。インフラ製品やサービスの利用者または、それらに支えられている人々が、あの企業は非常に重要なことをしていると思うこと、あるいは、自分の両親が勤める企業はこんなすばらしいことをやっている、誇りに思えるというのも大事な価値であると思う。企業の方とお話しする中で、社内における取組の浸透、認知の浸透ということも少し話題になることがある。社内の担当部署は非常に熱心に、すばらしい取組をされているが、ほかの部署になかなか伝わらないというお話をよく聞く。一方で、今回ご紹介いただいた中では好事例もあるようなので、例えば評価軸の1つとして、社内の担当部署外への浸透についても評価の観点に加えてはどうか。
- ・ 評価の基準については、健全な水循環がもたらす幅広い便益をどのように測るか、かつ日本の特性に合った利用可能な指標としてどのようなものがあり得るのかというところは、非常に難しい問題かと思う。一方で、それぞれの流域で目指すところが違うため、統一的なものというよりは効果を測ろうとしたときにどのような手法があり得るか、測定し得るかといった方法論みたいなものが共有できるとよいかと思う。いずれにしても、この評価の基準はこれからすごく変わっていくもの、進化していくものだと感じている。変わっていくという前提で、年号とか番をつけて、アップデートしていけるものがないかと思う。
- ・ また、広がりという意味で、木場委員からもあったとおり、CHALLENGE企業が増えていくところは大事なところだと思う。特に中小企業にとって、申請の更新への負担などでハードルが高まり過ぎないように配慮が必要ではないか。実際にやっている取組自体が大事なことなので、それを評価できるような形にしていくべきだろうと思う。
- ・ 定量的な評価というのは重要であるが、測れないというか、測れるけれども単独ではすごく小さな貢献だが、でも、そういう小さな貢献も大事にしていかないといけないと思う。それが集合体になって大きな取組になるということであれば、そういう集合的な取組への貢献の価値についても評価していけるとよいのではないか。

(辻村座長)

- ・主に、認知度の向上、協働・連携という観点、社内への浸透も、確かに今回の1月末の水循環企業連携フェアでも幾つかの企業の方の中からそういったご発言があった。実際にこの登録・認証制度が社内での認知度向上に機能している事例もあったかと記憶をしている。
- ・それから、水平展開、最後のところでCHALLENGE企業を広げていく、多くしていくということもあるかと思う。一方で、より高いところの認証制度の普及によって認知度が高まっていけば、そこを目指すためにCHALLENGEから入っていくという普及効果もあるのではないか。

(中屋委員)

- ・企業活動そのもの、営利活動それ自体が健全な水循環に役立っている場合は、積極的に認証していくべきだと思う。ただし、どのように役立っているかを科学的というか定量的に説明でき、あるいは企業がそういうデータを示して、それを吟味して認証していく。企業活動そのものが水循環に役立っているということが本当は一番いいのだろうと思う。
- ・そのような認証をすれば企業のモチベーションも上がり、例えばそういう水循環をよくしていく方向の企業活動がまた生まれてくるのではないかと思う。そのような企業の営利活動が健全な水循環に役立っている場合を積極的に認証していくことがいいと思う。

(辻村座長)

- ・いわゆる社業をどう評価していくのかというのは、現行の制度の中でもよく議論になるところ。企業の方へのアンケートのご意見でも、それは認めてほしいというところもあるところ。
- ・企業の方の中では健全な水循環に資する活動をCSRとしての活動ではなく、本務としてやっておられるところもある。それはある種、企業の方の本気度が出ているところだと思うが、それを逆に社業としてやっちゃっているから認証の対象にしないというのは逆の方向になっている。中屋委員がおっしゃった地域に役立っているということ、地域に貢献しているということを定量的に示すことができれば、積極的に取り上げてもいいのではないかというご発言かと思う。
- ・そういった中で、例えば先ほど中屋先生からご発言があった、自治体との協働が進んでいるとか、企業が社業としてやっているのが、そこに他のステークホルダーとの連携が含まれる、あるいは場合によってはNGOやNPOの団体等も含まれてくるということであれば、十分に地域貢献をしていると言えるのではないかと思う。それをどう評価するかという定量的な評価方法となると、なかなか難しいところはあるが、全体としては中屋委員のおっしゃったできるだけ社業を地域に貢献しているという観点から認めていったほうがいいのではないかというご意見には共感を覚えるところ。

(木場委員)

- ・今回の論点というのは、ただやっているだけというレベルから内容的というか、その深さ、質などを問うていくということだと思う。それに関して賛成である。
- ・本業をどうするかというところで、今まではCSR的なところで植物、森林にいいこと、大きな意味で水にいいことをやっていたが、今後はCSVという言葉があるが、本業として事業の戦略の中に水というものを組み込んでいくことも認めていかないと、企業のモチベーションも上がらなくなってしまう。高度な取組と、初歩的なチャレンジの一から頑張ろうという取組と、しっかりとそこは分けて評価して、事務局の案では表彰とあるが、表彰なり、もっと世の中にホームページなどでPRできるような仕組みをつくっていくと、より企業の方々もモチベーションが上がると思う。
- ・サントリーの環境の広告はまさに「水と生きる」という本当に短いけど、すごく心構えというか水に対する思いが伝わる。「水と生きる」は5文字ですけども、すごくインパクトのあるキャッチフレーズだと思う。
- ・今まではどちらかというと姿勢とか気持ちとかやりたいという意欲も評価していたが、そういう企業のこれから水にどう取り組んでいくかという姿勢だけではなく、今度は成果も求める段階にこの委員会も来たのかということが印象である。
- ・資料24ページのピンクの部分に関しては審査することになっていくのかと思うが、その指標をどうするかをしっかりと話し合っていて決めていくことが、この次の段階で大事だと思っている。
- ・自分は、国交省の中でブルーインフラの委員会に立ち上げから5～6年おり、ここ3年ぐらいはブルーインフラ大賞、ブルーカーボンの取組に関して日本全国から募集し、審査している。ブルーカーボンの場合は、3回やって悩んだことが、企業が提案すると非常に先進的な取組、それこそ本業を生かして素晴らしい技術的にも先端のことをプレゼンしてくれるが、ただ指標の中に地域との結びつきとか、教育とか、あるいは子供たちを巻き込んでとか、地元の方を巻き込んでとか、いろいろなことが入ってくるため、技術だけではなかなか高得点が取れない。
- ・逆に、みんなが集まって小さいことでもやろうよという方々は、もう10でも20でも横のつながりはあるが、何となく技術面では先進的ではなく、どこのやっていることも似たようなことになってしまうなど、いろいろと指標によって評価が変わってくることもある。
- ・地域ごとに課題があり、それが地域によって違うが、港の形とか、海産物の件とか、気候とか、全国で見ると共通の課題がある。優秀なランクの方々の取組は本当に横展開をして、同じような悩みや課題を持っているところに広く周知し、その地域の方々もあの企業を見習って同じようにやってみようというサンプルになるようなところをより高く評価していき、分かりやすくしてあげることが大事だと思う。

- ・今回の事務局の論点に関しましては賛成であり、より議論を深めていったらいいと感じている。

(辻村座長)

- ・審査指標となると、木場委員がおっしゃったように、企業であれば当然先進的な技術を持って地域に貢献していることもあり、加えて地域となれば子供の教育とかそういったものをどうやって評価するのか。その取組で何人集めたかという人数などはよくありがちであるが、KPIは子供の人数とか、それで評価できるのかというところもあり、難しいと思った。
- ・地域の特有の課題もあるが、その特有の課題が実は共通の課題である場合もある。それをどのように水平展開しているのか、水平展開され得るのか。非常に大事なポイントを整理していただき、ご発言いただいた。

(辻村座長)

- ・そもそもどうして健全な水循環に資する活動をするのかということについて、前の有識者会議の中でたしか千葉委員から究極的にはウェルビーイングの実現につながるというご発言もあり、現段階の登録・認証制度の中ではそこまで踏み込んだ項目は入っていないが、そういう観点でウェルビーイングのご発言が記憶に残っていたので、千葉委員から御発言いただきたい。

(千葉委員)

- ・まず事務局様からご提示いただいた論点の中で、ACTIVE企業の中から優秀な企業を選び出していく枠組みについては、こういったものはあっていいのではないかと思う。
- ・これは先進的な取組をされている企業の方がより発展していかれるというところで有効な取組であり、国際標準との接続という意味でも必要なことかと思う。
- ・一方で、社会側からすると、往々にして認証制度が複雑になっていくと、制度に対する理解度が下がりがちということがあるかと思う。特にこのCHALLENGE企業とACTIVE企業で、ACTIVE企業の中でもさらにACTIVE企業みたいな構造になってしまうと、社会からすると一体何が違うのかがよく分からない。
- ・また、恐らくだが、一番目立つ企業さんの取組だけがすごく輝いて見え、CHALLENGE企業さんの取組が相対的に評価されにくくなってしまいう形になるというか、スター企業に光がすごく当たってしまうということもあり、逆にCHALLENGE企業がそこに入るモチベーションが下がってしまう懸念がある。
- ・社会に対してこの段階みたいなものをどううまく分かりやすく見せていくかがとても大事で、ENTRY企業、STANDARD企業、ADVANCED企業みたいな、分からないが、あくまでもチャレンジしているところがスタートのポイントとして、そこに勇気を持って参加しているというようなポジティブな見せ方を意識してやっていくことが大事かと思う。

- もう一つ論点であったアドバンスの企業をどう評価していくかについて、事務局案の地下水涵養で全体の水収支を改善するみたいなポジティブな量的なインパクトにとどまらず、ステークホルダーで連携していくみたいな考え方は必要だと思う。また、国際的な様々な認証制度の評価基準とも整合的だと思う。
- 一方で、ウェルビーイングとの関連は評価が難しいところがまだまだあると思っている。定性的なものというか、量に表現できないものをどう評価していくのか。
- 特に地下水だと、例えば地域でずっとやっている和菓子屋とか、酒屋とか、小さい地域の会社みたいなところがガバナンスのネットワークをつなぐのにとっても大事な役割をされていることがある。そういった極めてローカル性が高く定性的なことが、その地域全体の水を守る上でとても大事だとなったときに、それをどう数字にのせるかということを見ると、とても難しいと思う。
- ストーリーを評価していくというか、ナラティブやストーリー、あるいは地域のステークホルダーからの推薦コメントをいただくなど、外からこのような関係であるということ、会社だけではなく、周りの住民とかNGOとかからもいただき、総合的に評価していくみたいな運用ができるといいのかなと思う。それをもってして地域の全体的な水のウェルビーイングみたいなところを評価していく仕組みができると良いのではと思った。

(辻村座長)

- ストーリーやナラティブを評価していく、そういった一連のストーリーがきちんと多様な人から評価されるような方向性は大事かと思う。水循環に関わるコミュニティーの中で、そのようなナラティブをいい意味で評価し合うことが実現すれば、それは面白いかと思う。
- 一方で、定量的な評価軸を否定するものではなくて、その辺のバランスは両方あってもいいのかという感じもある。

(瀬田委員)

- 事務局からご提示いただいている論点については、基本的には効果を見せていくとか、あるいは協働的な取組を評価するといった形を入れていく、また最終的な観点、アピールの部分も含めたアフターサポートといったところ、そこを連携させていくといった考え方は非常に重要であり、賛成である。
- 非常に科学的な側面も重要だが、WWFなどがよく言っているのが、コンテキストという言葉をよく使っており、流域の中では歴史的・文化的な背景も含めて、水域が社会にとってすごく重要な文化的な側面も含めて持っている、あるいは生態系にとって、水域がちょっと枯れてしまうと、何センチか下がると駄目になるというところもある。
- そういったところの重要性を認識して、そこに対する取組といったところを、まさにナラティブの関係性の中で、風が吹けば桶屋がもうかるではないが、そういったバタフラ

イエフェクトのようなインパクトのパスをつくってご説明されるといったところが、1つ重要な評価の観点かと思う。

- その上で、それを何らか定量的に表現をするという側面が、恐らく科学的な観点での評価の指標になると思う。重要なのは、科学的な指標に傾き過ぎると、結果的に水量や水質といった一側面をどうしても捉まえてしまわざるを得ないことになる。
- それだけやればいいのかということに偏重することはまた違うと思うので、ご議論にあったナラティブ的なインパクトのパスと科学的な補完的な意味での指標がセットになるというのは、評価の観点では非常に重要かと思う。
- もう一つ、ステークホルダーという言葉が使われると、具体的に誰なのかということが非常に重要で、自治体の方とか、あるいは住民の方とか、いろいろあるかと思うが、そういったところの方との関係性をどう構築しているのかという側面が、また見える化でできるような形の観点をに入れていくほうがいいのかと思う。
- 恐らく対話の関係とか、あるいは報告会をしている、あるいはウェブ媒体での公開もあるかもしれないが、幾つかやり方はあると思う。そのつながりの強さみたいなところをどう評価していくのかという観点も非常に重要かと思った。

(辻村座長)

- 最後の言葉尻を捉えるような感じになってしまうと本意ではないが、関係性、様々な多様な者というか、実体の伴った関与する人々がどう関係性を持っているか、対話、非常に重要な問題だと思う。平常時において関係性がきちんと構築されているところだと、非常時における対応も、まさに水リスクに関する対応もよりうまくいくということも言われている。
- 大阪公立大学の遠藤先生が、能登の地震のときに水インフラが止まって、そこで代替水源として井戸が使われたわけだが、それがスムーズに行くためには平時の関係性が非常に大事だということを指摘されていた。健全な水循環に資するという広い意味で非常に重要であり、まさに防災的なというか、水リスクの回避という観点からも非常に重要な問題だと思う。
- そこを定量化するのがいいのか、関係性をきちんとうまく評価していくのがいいのかというところも重要だと思い、その関係性という言葉に非常に引きつけられました。

(辻村座長)

- 非常に面白い観点をいろいろいただいたと思う。全体としては、健全な水循環全体に関する認知度を高めるということは、いずれにしてもいろいろな意味で大事なことだと思う。それがこの登録・認証制度をより豊かにすることにもつながることかと思う。
- 社業については、地域への貢献という観点からも、できるだけ登録・認証制度の中で

も含めるような方向がいいのではと中屋委員からのご発言もあったが、ほかの委員の皆様も概ねそういった方向で考えているかと受けたところである。

- ・また、CHALLENGE、ACTIVE、さらにその上のADVANCEDというか、いい表現をするときに、段階自体をちゃんと丁寧に説明するような、それも含めて認知度を高めていく努力も非常に重要なことという感じがしている。
- ・事務局からの論点のために準備をされた軸、評価ポイントあるいは点については、委員の皆様から全体としてはおおむねこの方向でというご意見が得られたかと思っている。
- ・その上で、ご意見の中でステークホルダー間の関係性、地域における様々な主体の方々の関係性をきちんと評価していくようなことが重要かと思う。社業であっても、そういったことを通じて関係性を構築して地域に役立っているということも含めて、あるいはなかなか定量的な評価対象にならないような取組もきちんと評価できるような方向性が、従来の国際認証で出てきている評価軸のまさにPDCAサイクルなのだと改めて思った。
- ・それに加えて、もちろん海外の企業も入ってこられるようにするのかという議論はまたどこかの段階できちんとしなくてはいけないとは思いますが、特徴としては、地域の関係性を豊かにしていくということは地域のレジリエンスを高めることにもつながっていくので、そういった観点も必要なのではないかということをご意見として賜ったと理解したので、総括の代わりにまとめをさせていただいた。

(瀬田委員)

- ・段階のところでエントリーの方のモチベーションを下げないようにというご発言も委員の方からあった。アフターサポートの中に段階を高めていくための場の形成が非常に重要かと思ったので、その点だけ付け加えさせていただく。

(辻村座長)

- ・アフターサポートの内容に関わることで、例えばCHALLENGE企業の方にはどうやったらACTIVEになれるか、さらにACTIVEの中からもうちょっと頑張るとさらに高みがあるということ、できるだけグッドプラクティスも、逆にうまくいかなかったことも含めてきちんと出していくというのがいいのかと思う。
- ・そういったことも含めて、いろいろな観点が評価軸に関しても出たので、その辺を参考に、今後議論を深めてよりよい制度にできるように尽力できればと思う。

【閉会】

(玉置審議官)

- ・委員の皆様には活発な御議論をいただきまして、ありがとうございます。また、辻村座

長には円滑な進行とまとめをしていただきまして、ありがとうございました。

- ・この制度、2年たって次を迎えるに当たって、PDCAサイクル的に、今はどこに立ち位置があるだろうか、今のまま進めていいのか、発展していくためには、いろいろなチャレンジもしていかななくてはいけないのではないかと、そういったことで事務局内でも議論してやってきたところ。
- ・横軸を取組が広がる方向と、縦軸は質みたいなおことと位置づけ、2年目なので、裾野広げもしていかななくてはいけない。いろいろな方々が取り組めるものなのですよということについて、我々もまだまだ周知不足のところもあると認識しており、その裾野を広げしていきたいと思っており、さらに縦軸もチャレンジできないかということである。
- ・日本も人口減少社会を迎えて、水資源の涵養先である川上部分での人口なども含めて、いろいろなリスク、課題もあるのではないかと。水は誰もが使っているのだから、企業だけではなくて国民も含めてそういった地域資源を管理しながら、経済活動も活性化していかなければいけない。どういふことをやることによってそれを達成できるのか、いろいろな評価軸をつくっていくことは大事かと思う。
- ・国として今後の課題を捉まえて、こういうものをより評価していこうという視点を、今日紹介していただいたことも踏まえ、考えていきたいと思っている。
- ・2回、3回、4回と予定をしているので、引き続き委員の皆様方にはいろいろなご意見をいただいて、3年目の新たなスタートを良いように切れるように皆さんと意見交換をさせていただきたいと思っている。引き続きよろしくお願いいたします。

○田中（輝）参事官補佐　ありがとうございました。

本日は、御多忙の中熱心な御議論を賜りまして、誠にありがとうございました。

今後、年2～3回程度開催させていただくことを予定してございます。具体的な日程につきましては改めて調整させていただきますので、引き続き御協力いただければ幸いです。

それでは、これもちまして、本日の水循環企業登録・認証制度のあり方検討会を終了させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。